地域の宝
但馬牛物語
★26★

若い力で全国に飛躍を

渡辺　大直

2020年東京オリンピックが近づいてきたせいか、新聞やテレビでオリンピックの話題を目や耳にするようになった。

牛の世界にも〝オリンピック〟と呼ばれる催しがある。

全国和牛能力共進会がそれだ。国際大会ではないのに〝オリンピック〟と呼ばれるのは、オリンピックが4年ごとに開催されるように、この共進会が5年ごとに開催されるからなのかもしれない。

またこの共進会の第1回が、前回の東京オリンピックがあった2年後に開催されたので、社会のムードが呼び方につながった可能性もある。

ところで、牛が大きく肉がたくさん取れ、霜降りが入ったおいしい肉ができ、母乳がよく出て子牛を早く大きく育てるのは遺伝する能力だ。

しかし、牛にそうした能力をどれだけ発揮させるかは、牛を飼う農家の技術力による。つまり全国和牛能力共進会は、各県が取り組んだ改良成果と磨き上げた農家の飼育技術の総合力を競う国内最高の場だからであろう。

この共進会では、種牛の部で子牛を産む繁殖用の生きた牛の姿形を、肉牛の部で枝肉という骨付き肉の重さや肉質を競う。牛の姿形は、良い子牛を産み、育て、永く子牛を産み続けられる耐久力等を表しているとして評価される。肉質は霜降りの入り具合、余分な脂肪の有無、ロースやバラといった部分の形や大きさでも評価される。

また同じ種雄牛の子供たちで種牛と肉牛のグループを組み、種牛能力と枝肉生産能力の両方を競う総合評価群という出品区もある。

そんな全国和牛能力共進会が9月7日から仙台市で、全国39道府県より517頭の代表牛を集めて開催される。

〝黒毛和種の原種〟とか〝牛肉ブランドの最高峰〟と評される但馬牛、神戸ビーフを擁する兵庫県だが、全国和牛能力共進会の実績となるとちょっと寂しい。

今回、11回目を数えるが、第6回で菊安土井という種雄牛の子供たちが、肉牛の部のチャンピオンを獲得して以来、栄冠から遠ざかっている。

兵庫県は種牛の部に7頭、肉牛の部に2頭、総合評価群に7頭、関連行事として行われる高校生の部に1頭の17頭をエントリーし、代表牛を決める最終選考が7月14日と24、25日にあった。

そして目を引いたのは、種牛の代表が全て但馬から選ばれたことだ。また高校の牛も有望だと聞いた。近年但馬では若い後継者が育っている。そんな若手の牛たちが代表牛に名を連ねていて、若い力がこの結果につながったと思う。

但馬牛は小柄で、全国共進会向きの大柄な牛を選ぶと、体のバランスが悪くなったり、欠点が目立ってしまった苦い思い出がある。そんなこともあって肉牛に期待しがちだが、ぜひ若い力で乗り切り、目にモノ見せてほしい。がんばれ若者たち!!

全国和牛能力共進会に出品する県代表牛の選考会。将来を担う若者たちの活躍にも期待

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます